

## 近現代 12 イマーム派法学者の肖像 ——イラン・イラクにおける法学者の修学過程——

黒田 賢治\*

### I. はじめに

近現代におけるイラン、イラクなど12イマーム派が当該社会において文化的ヘゲモニーを確立した地域における社会で、法学者<sup>1)</sup>が重要な役割を担ってきた事例が数多く報告されている。例えば、近代においてはカージャール朝治下に勃発したタバコ・ボイコット運動やイラン立憲革命[e.g. Algar 1969]、部族と法学者によって組織された対英ジハードである1920年暴動が代表例である[e.g. Nakash 1996]。また現代では、イランにおける1970年代末期からイランを席卷した反パフラヴィー王政運動[e.g. Dabashi 1993]や近年のフセイン政権崩壊後のイラクにおける国民選挙とスイスターニーの動向[e.g. 山尾 2007]、さらにレバノンのヒズブッラーの活動が挙げられよう。

しかし一定の政治状況下での法学者の機能／役割に関心が注がれてきた一方で、一部の研究を除いて[e.g. Mottahedeh 1986]、そうした法学者を何が支えているのかを問う研究、つまり有名、無名を問わず法学者が一体いかなる関係性のもとで法学者たりえているのかを問う研究はまだそれほどなされていない。その理由として、以下のことが考えられる。第一に法学者についての研究の多くが政治分析の中で展開されていることに問題がある。政治動向を分析するために、無名の法学者の生涯、また高名な法学者であっても彼らの政治動向以外の側面などが第一義的に重要視されないのは容易に想像できる。第二に法学者によって構成される12イマーム派法学界が分析される場合も、ややもすれば法学界の構造内の権威者に注目が集まり、一般の法学者にはいまだ目が向けられていない。しかし政治動向や12イマーム派法学界を分析する際にも、その中心的な法学者に着目するだけでなく、幅広く法学者を法学者たらしめる関係性についても明らかにしなければ、十分な研究と言えないのではないだろうか。

上記の問題意識のもと、本稿では、特にイランに注目し、法学者を法学者たらしめる関係性の変容に着目し、シーア派法学界がどのように形成されているのかを考察する。その具体的な方策として現在のシーア派法学界内部にある、法学者の関係を規定するシステムとしての称号と対応する法学者のヒエラルキーに着目し、法学者の制度的背景を検証する。さらにそうしたヒエラルキーが成立する年代を境に時期を前後にわけ、両時期における法学者のキャリアパスの特徴を、具体的な法学者の生涯を交えながらそれぞれ描写し、法学者を法学者たらしめる関係性がどのように変容してヒエラルキーが形成されていったのかを追っていきたい。

### II. 現代 12 イマーム派法学界の史的形成過程

本章では、現代の12イマーム派法学者の特徴であるヒエラルキーの史的展開に着目し、そこに

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) イスラーム知識人を意味する「ウラマー」と表記されることが多いが、本稿では法学を議論の中心にすえるため、「法学者」とする。

見える重要な転換点を明らかにしていきたい。その転換点は同時にⅢ以降で法学者の生涯を記述するうえでの重要な分岐点となる。

現在の12イマーム派の法学者を他のイスラーム世界の法学者集団から峻別する重要な特色のひとつとしてヒエラルキー構造がある。現在のイランでは、12イマーム派法学者の間には特定の称号と対応するヒエラルキーがあり、6つの段階で構成されている。下位から順に「学生(Talaba)」、「イスラームの信頼 (Thiqa al-Islām)」、「イスラームの証 (Hujja al-Islām)」、「イスラームとムスリムたちの証 (Hujja al-Islām wa-l-Muslimīn)」、「アーヤトッラー (Āya Allāh)」、「大アーヤトッラー (Āya Allāh al-‘Uzmā)」である<sup>2)</sup>。

このようなヒエラルキーは、一般信徒と法学者との間に横たわり、法解釈に関する有資格者と無資格者の区別を明確化する働きをもつ。有資格者とは、自身の営為により、各種問題に対して法的有効性をもつ回答を出すことができるムジュタヒド (Mujtahid) のことであり、おおよそ「イスラームとムスリムたちの証」以上の称号をもつ法学者がそれにあたる。一方無資格者は、一般信徒と「イスラームの証」以下の法学者であり、彼らの法解釈は法的有効性をもたない。前者と後者の間には従われる者 (muqallad) と従う者 (muqallid) の関係が横たわっており、前者に後者が服従することを意味する。こうしたムスリム間の関係はハディースを典拠とし、再解釈された見解として現在のイランにおける12イマーム派の間で受け容れられている [Moussavi 1994: 286]。

特定の法学者の階層と一般信徒の差異化は、10世紀半ばにイマームとの交信が不可能になって以降、イマームの任務が法学者に委譲される過程で誕生していった。その過程は、フムス (khums) をめぐる歴代法学者の見解からうかがうことができる。フムスはもともと戦利品を対象とした5分の1税である。しかし12イマーム派法学では、海からえられた富、埋蔵された富、鉱物資源などもその対象となる。他方、その分配対象は神、預言者、預言者一族である「お家の人々」、孤児、貧困者、旅人である。イマーム在時には、イマーム自身がフムスを受け取り、フムスを分配することが原則であった [Cleave 2004: 533]。それゆえイマームの隠幽は、フムス制度の存亡、あるいは存続させる場合には誰がイマームの務めを担うのかが重要な問題となった。

10世紀頃までフムス存亡が議論されていたが、11世紀にトリポリのカーディー、イブン・バラージュ (Ibn al-Barrāj, d. 1088) を先駆けにして、法学者が一時的にフムスを預かるという主張がされ始めた [Sachedina 1988: 240]。それは同時に一般信徒と法学者との差異化の先駆けでもあった。フムスをめぐる議論は、その後制度の存続を前提に展開され、イマームの権利を担う人物に関する議論へと発展していく。議論が展開するにつれて、信徒内の峻別をますます強めていく傾向にあった。サファヴィー朝中期以降、信徒内の平等を唱えるアフバル学派が台頭し、法学者と一般信徒に明確な区別を主張する立場は一時的に影を潜めるものの、19世紀初頭には、イラクのイマームの廟都市であるアタバートを中心に、ペフバハーニーやその弟子の活動によりウスール学派が復興するなかで、信徒内の峻別を行う立場が再び多数派を占めるようになった [Momen 1985: 124-38; Amanat 1989: 36-7]。しかしながらここまで述べてきた歴史のなかで称号を伴った法学者の明確な序列に関する議論はまだあられていない。

2) これらに加え、「イマームの代理人 (nā'ib al-imām)」を加える場合もある [Momen 1985: 289, 344 n18; 東長 2002: 204]。しかし「イマームの代理人」は一般的なヒエラルキー構造には含まれない、特殊な用例とみなし除外した。また本稿における転写に関して、『岩波イスラーム辞典』の規則に従い、18世紀以降イランで活躍した人物に関しては通常のペルシア語転写方式に準拠する。しかしコムがナジャフと並ぶ学問府となる以前、12イマーム派はその活動を通じて、インド、イラン、イラク、レバノンなどの各地のコミュニティに広がっており、領域主権国家の域をはるかに超越している。それゆえ、本稿ではコムがナジャフと並ぶ学問府となる以前に関してはアラビア語の転写方式を採用し、それ以降に関しては各々の活動拠点の言語に従い転写を行う。

法学者のヒエラルキーは、近代的な法学権威 (marji' al-taqlid)<sup>3)</sup> 制度の成立とともにあらわれたとする説が一般的である [cf. Momen 1985: 203-205; 桜井 2006: 80-83]。シーア派コミュニティにおける集権的存在としての法学権威は、ハサン・ナジャフィー<sup>4)</sup>、あるいはムルタダー・アンサーリー<sup>5)</sup> に始まる<sup>6)</sup> [cf. Laṭīf-Pūr 1379: 132-6; Mervin 2004: 66]。しかし法学権威があらわれはじめた 19 世紀半ばには、称号と対応する法学者間の明確な序列はまだ存在しない [Amanat 1988: 98-102; Moussavi 1994]。アマナトは、称号と対応する法学者間のヒエラルキーが制度化されるのは 1979 年のイラン・イスラーム革命以降であると指摘している [Amanat 1988: 124]。

最初の近代的法学権威の座にあったハサン・ナジャフィーには「法学者たちの長 (Shaykh al-Fuqahā')」という称号が、またムルタダー・アンサーリーには「偉大なる長 (al-Shaykh al-A'zam)」という称号が付されていた [Moussavi 1994: 126] がそれはまだ制度化された称号ではなく、現在の称号とも異なる。法学権威の中で、現在存在する称号が冠された最初の人物はムハンマド・ハサン・シーラーズィー<sup>7)</sup> であるが、現在のヒエラルキーでは比較的下位に位置づけられている「イスラームの証」が付されていた<sup>8)</sup>。しかしイラン立憲革命期までにイランの法学者の間で、「イスラームの証」が多用されたことを受け、それよりも上位の称号として「アーヤトッラー」が用いられるようになる [Amanat 1988: 124; Moussavi 1994: 295]。さらに立憲革命期になると、「アーヤトッラー」もまた多用されたため最上位の称号の役目を果たさなくなり、さらに上位の「大アーヤトッラー」が導入された [Amanat 1988: 124]。これらの称号は、法学者相互の関係を明示するために導入されたというよりはむしろ、法学界の最高権威と他の法学者明確に峻別するために導入されたといえる。イラン革命以降の、称号と対応したヒエラルキーはこのころにもまだ明確に存在しておらず、イラン革命以前は何らかのかたちでヒエラルキーが存在していたとしてもインフォーマルな存在にすぎなかったと判断できるだろう。

称号と対応した 12 イマーム派法学者のヒエラルキーの形成は、イラン革命以降のイランではっ

- 3) 先行研究においては、多くの場合 Marja' al-Taqlid と表記されているが、アラビア語の文法規則に従えば、Raja'a の場所・時を表す名詞は Marji' であり、Marja' は行為を表す。不思議なことに、ペルシア語では Marja' が場所・時を、Marje' は行為を表し、アラビア語の場合と逆になる。ここではアラビア語文法に従い Marji' al-Taqlid と転写した。
- 4) Shaykh Muḥammad Ḥasan ibn Bāqir al-Najafī. 1787 年、ナジャフに生まれる。ジャアファル・カーシフ・アル＝ギター (Ja'far Kāshif al-Ghīṭā') やシャイヒー学派のシャイフ・アフマド・アフサーイー (Shaykh Aḥmad Aḥsā'ī) の下で学ぶ。ナジャフで教鞭をとり、次代を担う法学者の育成を行い、ナジャフを指導する法学者となる。『言葉の宝石 (Jawāhir al-Kalām)』など法学に関する著作物を多数著し、1849/50 年に没する。[Momen 1985: 318]。
- 5) Murtaḍā ibn Muḥammad Amīn Anṣārī Tustarī. 1799 年ごろ、イランのデズフルに生まれる。カルバラーやカーシャーン、ナジャフで学んだのち、ナジャフに居を構える。法源学の発展上、重要な役割を果たした。『利益の書 (Kitāb al-Makāsib)』などの著作物を残す [富田 2002: 102]。H. ナジャフィーの死後、シーア派法学界の指導的地位となり、1864 年に没するハサン・ナジャフィーの死後、シーア派法学界の指導的地位となり、1864 年に没する。
- 6) 法学権威の起源に関しては、見解が著しく異なる。9 世紀半ばのイマームの小隠幽に起源を求める見方や 10 世紀のクライニー (Abū Ja'far Muḥammad ibn Ya'qūb al-Kulaynī d. 941) に起源を求める見方 [Tajik 1377: 84]、さらには 14 世紀のアッラーマ・ヒッリー (al-'Allāma Jamāl al-Dīn Abū Maṣṣūr Ḥasan ibn Yūsuf ibn al-Muṭahhar al-Hillī d. 1325) に起源を求める見方がある [cf. Aziz 2001: 143]。ただし法学権威が 12 イマーム派のコミュニティにおける集権的な存在となるのは、財の集中という側面からもハサン・ナジャフィーあるいはムルタダー・アンサーリーの時代であると考えてよからう [Tajik 1377: 85]。
- 7) Sayyid Muḥammad Ḥasan al-Shīrāzī al-Husaynī. 1815 年にシーラーズで生まれ、イスファハーン、ついでナジャフで学んだ。ムルタダー・アンサーリーの死後、同時代の法学者と法学権威の座を争う。1870 年頃に、ラシュティ (al-Mīrzā Ḥabīb Allāh al-Rashṭī) の辞退により、唯一の法学権威 (marji' al-taqlid al-mutlaq) となった [Amanat 1988; Moussavi 1994]。1875 年からサーマラーに移住し、同地でマドラサを開校し、今日まで続く法学教授法を体系化した。1895 年に没する。パーブ教の始祖セイイェド・アリー・モハンマドとは双方の父方の祖父を介して親戚である。
- 8) 近代以降で、「イスラームの証」の称号が最初に冠せられたのはシャフティ (Sayyid Muḥammad Bāqir ibn Muḥammad Taqī al-Shaftī al-Rashṭī d. 1844) である。だがそれはヒエラルキーに対応した称号ではなく、シャフティがカーディーであり、ムフティであったことに由来する。この意味での「イスラームの証」という称号は、シャフティの死後、アサドゥッラー・ブルージュルディー (Asad Allāh al-Burūjirdī)、アサドゥッラー・シャフティ (Asad Allāh al-Shaftī)、ムッラー・ナラーキー (Mullā al-Narāqī) に冠されている [Amanat 1988: 107, 128 n29; Moussavi 1994: 295]。

きりと姿をあらわす。そして現在では12イマーム派が広がる地域で幅広く認知されている<sup>9)</sup>。その背景には、イラン革命によって、イランが12イマーム派の中でヘゲモニーを獲得したという事情があるかもしれない。しかし本稿では、そのような政治力学上の展開に着目するのではなく、法学者を取り巻く環境の変化に着目したい。

ヒエラルキーが明確化する一つの契機としてコム<sup>10)</sup>の学術都市としての復興が挙げられる。1920年代に開始するコム<sup>10)</sup>の学術都市としての復興は、イラクの廟都市中心に展開されていたそれまでの12イマーム派法学界にとって大きな転換期となった。さらにイラン、イラク双方に1920年代半ば以降、国民国家が成立すると、12イマーム派法学界が法学者の帰属コミュニティの問題によって分断されることとなった。法学者とそれを支える関係性はそのような状況下でどのように変化し、そしてイラン独自の明確なヒエラルキー制度が形成されていったのだろうか。法学者の具体的なキャリアパスからその点を考察したい。その際、便宜的にコム復興以前を法学者にとっての「近代」、コム復興以後を法学者にとっての「現代」とする。

### III. 「近代」における法学者のキャリアパスとその特徴

本章では、「近代」の法学者のキャリアパスとその特徴について描写したい。その際、可能な限り具体的に法学者の生涯を示すこととする。それは次章で行う「現代」の法学者のキャリアパスの特徴がどのようなコンテキストで変容したのかを明らかにするためである。

「近代」の法学者を法学者たらしめた重要な要因には、家系がある。それは一大名望家系に属していたという意味ではなく、法学者を志す多くの者が、法学者の子弟であったという意味においてそうなのである。また法学者を志す多数がサイドであったことも大きな特徴である。このような現象の背後には、既にフィッシャーらによって指摘されているように、通常、法学者は法学者の娘と結婚していたという状況がある [Fischer 1980; Litvak 1998]。その事例として、サイド・アブー・アブドゥッラー・ザンジャーニー (Sayyid Abū ‘Abd Allāh ibn Abī al-Qāsim ibn al-Kāzim ibn Muḥammad Ḥusayn ibn Muḥsin ibn Sulaym ibn Barhān al-Dīn ibn ‘Alī ibn al-Ḥasan ibn ‘Abd Allāh ibn ‘Alī ibn Sulaymān ibn Aḥmad ibn Muḥammad ibn Dāwūd ibn Ibrāhīm ibn Tāj al-Dīn ibn ‘Izz al-Dīn ibn ‘Abd al-Raḥīm ibn Muḥammad ibn Ibrāhīm ibn Ḥusayn ibn Mūsā ibn Ibrāhīm al-Murtaqā ibn al-Imām Mūsā al-Kāzim al-Mūsawī al-Zanjānī)、サイド・ジャワード・アル＝ターリカーニー (al-Sayyid Jawād ibn Mahdī ibn ‘Alī Naqī ibn Aḥmad al-Ṭāliqānī al-Ḥusaynī) の生涯についてのアーガー・ボゾルク・ティフラーニーの記述が興味深い。

サイド・アブー・アブドゥッラー・ザンジャーニーは1262 AH/1845-6年にザンジャーンで生まれた。彼はムーサー・カーズィムに由来するサイド家系であった。彼は兄のアブー・ターリブに読み書きを習い、その後ナジャフでサイド・フサイン・クーフカマラーイー<sup>10)</sup>、ラー

9) 例えば、レバノン在住の法学権威ファズルッラーのウェブサイトでは、アラビア語バージョンで大学者(‘Allāma)と記されている一方で、ペルシア語バージョンには、「大アーヤトゥラー」と記されている。それはイラン系信徒に対して法学者の持つ学識の程度を称号で表すことが慣行となっていることを示している (<http://www.bayyinat.ir/index/>)。

10) Ḥusayn Kūh-Kamarā’ī タブリーズ行政区の、アルヴァナク (Arvanaq) に生まれる。タブリーズのハウザで学んだ後、カルバラーで学ぶ。またその後、ナジャフのハウザで学び、ハサン・ナジャフィー、ムルタダー・アンサーリーに学んだ。アンサーリーの死後、法学権威となり、特にアゼルバイジャン地方の信徒が従った。1299/1881-2年にナジャフで死去した。[Eslāmī 1382: 354-355]

ディー・ナジャフィー、ムハンマド・ハサン・シーラーズイーに学んだ。ナジャフには 1285 AH/1868-9 年にやってきたのだが、同地でムルタダー・アンサーリーの娘婿サイイド・ムハンマド・ターヒル・トゥスタリー (Sayyid Muḥammad Ṭāhir ibn Ismā'īl Mūsawī al-Tustarī) の娘と結婚した。彼は 1294 AH/1877-8 年にザンジャンに戻り、1313 AH ラジャブ月 24 日 /1896 年 1 月 10 日に死去するまで、同地でシャリーアの問題や教授活動などの指導者となった (ṣāra marjī'an li-l-umūr al-shar'īya min al-jamā'a wa-l-tadrīs wa-ghayrihā)。彼の息子マフディーも法学者であり、彼は彼の叔父アブー・ターリブの娘婿となった。

マフディーによれば、彼はザンジャンとカズヴィーンで学んだ後、サブザワールでアリー・ハキーム・サブザワリー ('Alī al-Ḥakīm al-Sabzawārī) という法学者に学び、彼の父と 1285/1868-9 年ナジャフに赴いた。[cf. al-Ṭihrānī 1404: Vol.1, pp. 50-51]

このように彼は、サイイド家系であり、法学者であるサイイド・ムハンマド・ターヒル・トゥスタリーの娘と婚姻関係を結んでいる。サイイド・ジャワード・アル＝ターリカーニーについての記述からは、法学者と娘との婚姻が活発に行われていたことがよりはっきりとわかる。

サイイド・ジャワード・アル＝ターリカーニーの父は、テヘランのウラマーであり、パーチャナール、ムシャッジャラ・アール・アフマド街区の指導者であった。父の死後、彼がシャリーアの義務にいそしみ、指導者となった。また父と同様に礼拝指導者となり、1303 AH/1885-6 年ごろに死去した。サイイド・ムハンマド・タキー・イブン・ターリカーニー (al-'Allāma al-Sayyid Muḥammad Taqī ibn al-Ṭāliqānī) という法学者が彼の娘と結婚した。そしてサイイド・ムハンマド・タキー・イブン・ターリカーニーは既にアフンド・フラーサーニーの娘と結婚していたが、彼女は早世してしまった。彼は彼の息子たちと彼女の死後、1300 AH/1882-3 年にテヘランに赴き、ジャワード・ターリカーニーの娘と結婚したのである。この結婚によって誕生したのが、彼の息子アフマド (b. 1303 AH シャアバーン月 4 日 /1886 年 5 月 8 日)、マフムード (b. 1306 AH シャウワール月 23 日 /1889 年 6 月 22 日)、アブー・カーシム (b. 1318 AH/1900-1 年) である。サイイド・ムハンマド・タキー・ターリカーニーはサイイド・ジャワード・ターリカーニーの死後、金曜礼拝指導者と諸問題の模倣 (marjī') としての地位を引き継ぎ、1325 AH/1907-8 年に死去した。[cf. al-Ṭihrānī 1404: Vol.1, pp. 339-340]

このようにサイイド・ジャワード・アル＝ターリカーニーの記述に現われるサイイド・ムハンマド・タキー・イブン・ターリカーニーの婚姻歴によって、法学者と法学者の子女との婚姻が頻繁に行われていたことが明らかである。上記二つの記事からはさらに二つのことが見いだせる。第一に、法学者が法学者の家系から生まれること、第二に、それが職位の継承を伴って展開していることである。婚姻関係に関しては後述するムハンマド・カーズィム・ヤズディーの事例から以下のような家系図を作成することができる。図 1 において四角で囲まれている人物が法学者に当り、網掛けで囲まれ下線で示された人物は、法学者と婚姻した女性である。同家系図に示されるように、法学者を志す人物が法学者の息子である割合、また法学者の娘と結婚する割合は相当に高い。そしてそれを担保しているのが、家系内部での職位の継承である。それに関しては、サイイド・ミールザー・ムハンマド・バーキル・ハートゥーナバーディー (Sayyid Mīrzā Muḥammad Bāqir al-Mulaqqab bi-Ṣadr al-'Ulamā' ibn al-Mīrzā Muḥammad Muḥsin ibn Murtaḍā ibn Mahdī ibn Muḥammad

Şalih al-Khwātūnabādī al-Işfahānī al-Tihrānī) の生涯からより明白に読み取れる。

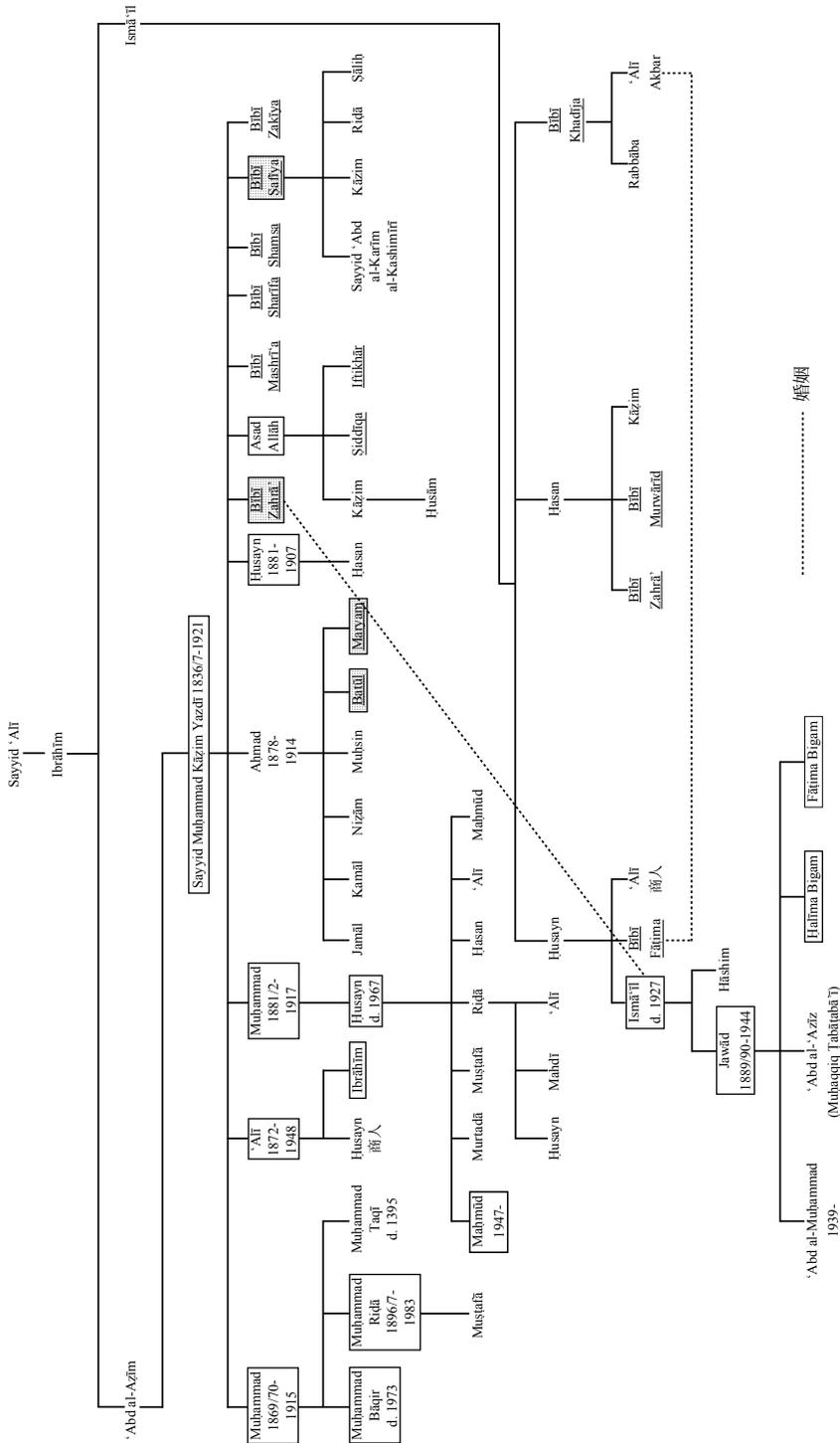


図1 ムハンマド・カーズィム・ヤズデイー家系図  
[al-Jabūrī 1385: 499-524] を基に筆者作成

サイイド・ミールザー・ムハンマド・バーキル・ハートゥナーバーディーはサファヴィー朝末期に活躍した大法学者マジュリスイー<sup>11)</sup>の娘婿ミール・ムハンマド・サーリフ (Mīr Muḥammad Ṣāliḥ) の子孫にあたる人物である。彼の父方の叔父アミール・ムハンマド・マフディー (Amīr Muḥammad Mahdī) は、カージャール朝第二代君主ファトゥフ・アリー・シャーがテヘランに建設した「王のモスク (Masjid al-Shāh)」として有名な金曜モスクの指導者に任命された。アミール・ムハンマド・マフディーの兄弟でありサイイド・ミールザー・ムハンマド・バーキル・ハートゥナーバーディーの父であるサイイド・ミール・ムハンマド・ムフスィン (Sayyid al-Mīr Muḥammad Muḥsin ibn Murtaḍā) とその3人の息子が、同モスクの指導者の地位を継いだ。その最初はミールザー・アブー・カーシム (Mīrzā Abū al-Qāsim) であった。長兄が 1271AH/1854-5 年に死去し、その地位を次兄ミールザー・ムハンマド (Mīrzā Murtaḍā d. 1301 AH/1883-4 年) が継承した。しかしミールザー・アブー・カーシムの息子ミールザー・ザイヌルアービディーン・イブン・アブー・カーシム (Mīrzā Zayn al-‘Ābidīn ibn Abī al-Qāsim) が成長すると、金曜礼拝指導者の地位を引き継いだ。一方ミールザー・ムルタダーは「ウラマーの指導者 (Ṣadr al-‘Ulamā’)」という尊称を得て、テヘランの模倣の一人となり (kāna min marāji’ al-umūr bi-Tihrān), サイイド・アブドゥル・アズィーズ・モスク (Masjid al-Sayyid ‘Abd al-‘Azīz) の指導者となった。

ミールザー・ムルタダーの死後、彼の弟であるサイイド・ミールザー・ムハンマド・バーキル・ハートゥナーバーディーが「ウラマーの指導者」の称号を得て、前述のモスクの指導者となり、信仰生活における模倣の一人となり、1313 AH/1895-6 年にこの世を去った。彼の地位は、彼の年長息子サイイド・ジャアファル (Sayyid Ja‘far) に引き継がれた。一方当該社会における指導者の地位は、兄弟のアーガー・ムフスィン・シャヒード (Āghā Muḥsin al-Shahīd d. 1335) に引き継がれ、その後、彼の兄弟アーガー・ヤフヤー (Āghā Yahyā d. 1370/1950-1) と前述のサイイド・ジャアファルに引き継がれた。[cf. al-Tihrānī 1404: Vol. 1, pp. 223-224]

「近代」の法学者は、このように王朝による庇護の下で、職位を獲得し、それを一族内で継承することで、法学者を家業としていた。またその影響は彼らの修学過程にも見ることができる。

「近代」の法学者の修学過程は基本的には三段階に分かれる。第一段階として法学者を志す者は、家庭での学習とともに出生地でクルアーンや読み書きを学んだ後、近郊の都市のマドラサに赴く。そこでアラビア語文法や基礎的な法学や法源学の一部を学ぶ。第二段階は、学術的中核都市のマドラサでの学習である。ナジャフやカルバラーなどアタバート (イマーム廟所在地) に生まれた者は、当然ながら初等教育からアタバートで学ぶことになる。また幼少期に親族とともにアタバートへと移住し、初等教育から同地で学ぶ場合もある [e.g. al-Tihrānī 1404: Vol.1, pp. 51, 67, 222, 299, 327, 322]。しかし一般的にはアタバートから遠いイランやインドに生まれた場合、イランであればイスファハーン、テヘランなど [e.g. al-Tihrānī 1404: Vol.1, pp. 8-9, 18-19, 27-28, 53, 58, 73, 76-77, 91-92, 135-136, 153-154, 159-160, 195, 196-197, 198-199, 206, 224-225, 247-248, 255, 267-268, 269, 295,

11) Muḥammad Bāqir ibn Muḥammad Taqī Majlisī. サファヴィー朝後期の有力な法学者。1627年サファヴィー朝の首都イスファハーンでイスラーム知識人の家系に生まれる。父はイスファハーン学派のムハンマド・タキー・マジュリスイーである。アッバース2世期に頂点に達したイルファーンの傾向と袂を分ち、伝承の蒐集に専念し、シーア派法学の百科大全と呼ばれる大ハディース集『光の大洋 (Bihār al-Anwār)』を編纂した。その後スライマーンによりイスファハーンのアシフ・アル＝イスラームに任命され、スフィーヤやスンナ派を排除するなど、強い政治的・社会的影響力を行使した。一方12イマーム派の信仰箇条を解説した一般向けの著作を多数ペルシア語で著し、同派をイラン地域で普及させることに最も貢献したイスラーム知識人の一人である [松永 2002: 911]。

308-309, 314-315, 317, 326, 353)<sup>12)</sup>、インドであれば18世紀前半に誕生した北インドの12イマーム派王朝であるアワド朝の中心都市として栄えたラクナウで学ぶ者も多い [e.g. al-Ṭihrānī 1404: Vol.1, pp. 34, 88, 128-129, 192-193]。それらの都市は、アタバートと諸地方を結ぶ学術的中核都市としての役割を担っていた。またその有名なマドラサには、同地で学んだ講師に加え、アタバートで修学し、同地で教鞭をとるものも見受けられる [e.g. al-Ṭihrānī 1404: Vol.1, pp. 18-19, 34, 61, 129, 190-191, 199, 224-225, 227, 240-241]。

地方の学術的中核都市のマドラサで学んだ後、さらなる就学によって偉大な法学者になりたいと望む者は、最終段階としてアタバートで修行する。しかしこの時点でドロップアウトする法学者も数多くいた。人名事典の記述からはこの時点で勉学をあきらめた法学者がどのような職についたのかははっきりとわからない。しかし一般的には、彼らがインフォーマルなヒエラルキー構造において大多数を占める中・下層を構成し、ロウゼハーン、説教師、マクタブ・ハーネの教師、マドラサの入門課程の講師、小さなモスクや廟の管理人、村のモッラーとなったと考えられる [Amanat 1989: 40]。また商業や農業に従事する者もいたようだ [Ṣāleḥ (ed.) 1385: Vol.3, pp. 329, 453]。一方、アタバートを目指す法学者は、法学権威といったアタバートで有力な法学者の議論に参加する。それは師との議論を中心とする教育であり、そこでの学問を修了したあかつきには師がイジャーザを発行する。

イジャーザを与えられた法学者のその後の道は三つに分かれる。アタバートで後輩たちを教育する立場となる道、故郷に戻り、指導者となる道、遠隔の12イマーム派コミュニティに赴き、その地で指導者となる道である。第一の道を進む者のなかには、ティフラーニーのように様々な著作を残したり、ハディースの伝承者となる者もいた。また彼らのなかには、自身の師匠の死を契機に故郷へ戻る者もいた [e.g. al-Ṭihrānī 1404: Vol.1, pp. 159, 186, 215, 277]。第二の道を歩む者の代表は、世襲の職位に就く者である [e.g. al-Ṭihrānī 1404: Vol.1, pp. 5, 121, 129, 134, 178, 180-181, 188, 215, 220, 225-226, 247-248, 279, 287, 292, 295, 331]。またイランやインドなど地方の学問的中核都市で、講師となる者もいる。その例としてサイイド・ムハンマド・バーキル・カシミリー・ラクナフイー (Sayyid Muḥammad Bāqir ibn Abī al-Ḥasan Muḥammad ibn ‘Alī Shāh ibn Ṣafād Rashāh ibn Ṣāliḥ al-Riḍawī al-Qummī al-Kashimīrī al-Laknahū‘ī) がいた。

ムハンマド・バーキル・カシミリー・ラクナフイーは、8代イマーム、リダーに由来するサイイドである。彼は1286AHサファル月7日/1869年5月19日法学者ムハンマドの家に生を受けた。彼にはムハンマド・ハーディーという兄弟がおり、法学者であった。そして彼もまた法学者としての道を歩み始めた。彼はマドラサで習うべき入門課程と中級課程を父から学んだ。その後彼は、アタバートへ移住し、さらに学業に勤しんだ。サーマッラーでは、長年アッラーマ・ヌーリー<sup>13)</sup>の上級課程に参加し、カルバラではシャフリラターニー (Muḥammad Ḥusayn al-Shahrastānī) の上級課程に参加した。さらに彼はナジャフで9年間学んでいる。そ

12) 「近代」のイランにおいては、マシュハドも重要な学問都市であった。マシュハドで学ぶ学生の多くは、アタバートに遊学することなく、同地で学問を修了した。当時のマシュハドがシーア派法学界でどのように位置づけられていたのかを慎重に考察する必要があるが、別稿に譲りたい。

13) ‘Allāma Nūrī/ Muḥaddith Nūrī 1254 AH シャーワール月18日/1839年1月4日に現在のイランのマーザンダラーン州で生まれる。初等教育を受けた後、1273AH/1856-7年に、師と岳父とともにテヘランからイラクに赴き、4年間ナジャフのハウザで学んだ後、イランに戻る。しかし後年、ムハンマド・ハサン・シーラーズイーの講義に参加し、カルバラを中心に教授活動を展開した。彼は多数のハディースを伝えている。1902年10月1日に死去した [Sardūdī 1385: 410-419]。

の9年間のうちに、同時代に高名な法学者であったシャイリーア・イスファハーニー<sup>14)</sup>、ミールザー・フサイン・ハリリー・ティフラーニー<sup>15)</sup>、ムハンマド・カーズィム・ヤズディー、アーフンド・フラーサーニー<sup>16)</sup>といった法学権威に学んだ。

彼は、その後インドの北西部ラクナウに赴く。当該社会で彼は、一般信徒の習従や教授活動、また礼拝指導者などシャリーアに関わるさまざまな行為に関して模倣となった。彼の人物は、概して敬虔であり、安寧な心の持ち主であり、意志がはっきりとした人物であった。彼はまた作家でもあった。例えば、ナジャフで1347 AH/1928-9年に発行され、ヒジャブを扱った『願望の供与 (*Isdā' al-Righāb*)』や、狂乱者との結婚の破棄を扱った『守られる話 (*al-Qawl al-Maṣūn*)』などが挙げられる。彼はまた詩人でもあった。彼は偉大なムジュタヒドであり、ラクナウの宗教的模倣であったのだ。

彼はまた1339 AH/1920-1年、そして1346 AH/1927-8年ラジャブ月に、ラクナウからアタバート参詣を行っている。1346 AH/1927-8年の参詣時には、ナジャフとカルバラーを参詣したが、カルバラーで病に倒れた。そしてシャアバーン月16日/1928年2月8日、午後5時にこの世を去った。彼の亡骸は、彼の父方の叔母の息子ムルタダー・カーシミーリーとともにナワブ・カーブリー墓地に埋葬された。彼にはムハンマド、アリー、リダーという3人の法学者の息子がおり、彼のマドラサにおける講師の地位は、ムハンマドが引き継いだ。彼の生涯について、彼の弟子サイイド・アーリム・フサイン (Sayyid 'Ālim Ḥusayn) が前述の『願望の供与』に記している [cf. al-Tīhrānī 1404: Vol.1, pp. 192-193]。

このように「近代」においては、アタバートとそれに連なる複数の学術都市を中心に12イマーム派の学問的空間が広がっていた。そのなかでも、アタバートに高名な法学者が集まっていたので、アタバートが中心的な役割を果たしたが、それはアタバートが他の学術都市に対して排他的な地位を確立していたということの意味しない。各地の学術都市はその社会で高名な法学者の指導下にあり、また法学者の職位も国家とのかかわりの中で付与される側面が多分にあり、経済的にもアタバートの法学権威の存在は必ずしも重要であったとは言えない [cf. Floor 2001]。しかし法学者にとってアタバートの法学権威は彼らがつむぎだすイスラーム学の拠点としては十分な機能をもっていた。このような時代に法学者を志す者には多くの共通点があった。その共通点とは、第一に修学過程、第二に出身家庭、第三に修学後の身の振り方であり、しかもその三者は相互に連関していた。しかしながらこれらは必要条件に過ぎない。そのことは20世紀初頭に活躍した法学権威であるムハンマド・カーズィム・ヤズディーの生涯が示している。

1252 AH、ヤズドの行政区キスナウイーヤ (Kisnawīya) の農家、アブドゥル・アズィーム

- 
- 14) Mullā Fath Allāh Isfahānī 1266AH ラビー・アル＝アッワル月に、ムハンマド・ジャワード・ナマズイー (Muḥammad Jawād Namāzī Isfahānī) の子として生まれる。イスファハーンで学んだ後、1295AH/1878年にナジャフへ赴き、ミールザー・ハビーブッラー・ラシュティーらの講義に参加する。ムハンマド・タキール・シーラーズイーの死後、唯一の法学権威となる。1920年12月20日に死去。[Moḥammadī 1385: 471-477]。
- 15) Mīrzā Ḥusayn Khalīfī al-Tīhrānī 1821年にナジャフで生まれ、同地で学問を修めた。1860年代半ばから、ナジャフで教鞭をとり始める。イラン立憲革命に参加し、アブドゥッラー・マザーンダラーニー ('Abd Allāh Māzandarānī d. 1912)、アーフンド・フラーサーニーとともに「三学者 ('ulamā'-ye thalātha) と呼ばれる。しかし立憲革命運動途中、1908年に死去した [Algar 2000: 497-498]。
- 16) Muḥammad Kāzīm Khurāsānī 1839年にマシュハドで生まれ、同地で初歩的教育を受ける。遊学のためにアタバート参詣団とともにイラクへ移動する。同地でM. アンサーリーらに師事する。M. シーラーズイーの死後、同時代の法学権威の一人として認められる。イラン立憲革命に参加する途上、1911年12月13日に没する [Hāiri 1986: 61-62; Amānī 1385: 444]。

(Sayyid ‘Abd al-‘Azīm) の家にムハンマド・カーズィムという男子が誕生した。アブドゥル・アズィームは類稀なる息子の能力に気づき、ムハンマド・カーズィムに法学者の道を歩ませることを決めた。しかしアブドゥル・アズィームはムハンマド・カーズィムが11歳の頃にこの世を去り、ムハンマド・カーズィムは悲嘆にくれた。しかし経済的な面では、残された家族の土地からの収入は減ることはなく、ムハンマド・カーズィムはマドラサへ通い続けることができた。彼はさらなる修学のため、ヤズドで最も有名なムフスイニーヤ・ヤードゥーミナル学院 (Madrasa Muḥsinīya Yādūminār) で学ぶことになる。そこで、ムッラー・ハサン・アルダカーニー (Mullā Ḥasan ibn Muḥammad Ibrāhīm al-Ardakānī d. 1315 AH/1897-8年) に入門し、アラビア語を学ぶとともに、中級課程の法学と法源学をモッラー・ハーディー (Mullā Ḥādī ibn Mullā Muṣṭafā d. 1308 AH/1890-1年) とアフンド・ザイヌルアービディーン・アクダーイー (Ākhund Zayn al-‘Ābidīn ‘Aqdā’ī d. 1327 AH/1909-10年) に学んだ。

ヤズドで学んでいた際に、マシュハドのイマーム・リダー廟に参詣を行った。彼は参詣と同時に、同地の高名な学者に学ぶことを目的としており、法学や法源学、ファルサファなどをマシュハドの高名な学者たちに学んだ。

その後彼は、師からイスファハーンで学ぶことを勧められ、イスファハーンで学ぶことになる。イスファハーンではムハンマド・バーキル・イスファハーニー (Muḥammad Bāqir al-Iṣfahānī)<sup>17)</sup> やフサイン・シールワーニー (Ḥusayn ibn al-Mīrzā ‘Alī Muḥammad al-Shīrwānī al-Qummī d. 1336 AH/1917-8年) らの上級課程に参加した。またサドル学院 (Madrasa Ṣadr) に居住し、ムハンマド・ジャアファル・アーバーディー (Muḥammad Ja‘far al-Ābādī)、ムハンマド・バーキル・ハーンサーリー (Muḥammad Bāqir ibn Zayn al-‘Ābidīn al-Khwānsārī)、ミールザー・ムハンマド・ハーシム・チャハールスーキー (Mīrzā Muḥammad Ḥāshim al-Chahārsūqī) に学んだ。修学の傍ら、彼はムルタダー・アンサーリーの『共益の書』に関して講義を受け持った。このようなイスファハーンでの活動の後、彼は、さらなる修学のためにナジャフへ移住した。彼のナジャフへの遊学費用は、彼の師である前述のムハンマド・バーキル・イスファハーニーらが工面した。こうして彼は1281 AH/1864-5年にナジャフに赴いた。

ナジャフでは、ラーディー・ナジャフィー (Rādī ibn Muḥammad ibn Muḥsin ibn Khidr ibn Yahyā al-Najafī d. 1290 AH/1873-4年)、ムハンマド・ハサン・シーラーズィーに学んだ。それとともに、彼はナジャフで教育活動と執筆活動を行った。彼の下で学んだ者は高名な法学者に限っても343人に及ぶ [al-Jabūrī 1385: 27-83]。そのなかには、コムを学術都市としての再建に大きく貢献したハーエリー・ヤズディー、またナジャフの有力法学者家系の成員であるムハンマド・フサイン・カーシフ・ギター、さらには1947年から1961年にかけて最高の法学権威として君臨していたホセイーン・ボルージュエルディー<sup>18)</sup> などが数えられる [al-Jabūrī 1385: 38, 46, 67]。それとともに、彼によって著された書籍は25に及び、そのなかでも特筆すべきは『固き絆 (al-‘Urūwa al-Wuṭṭā fī-mā Ya‘ummu bi-hi al-Bulwā)』である。同書は一般信徒の包括的な

17) 彼の母はナジャフの高名な法学者ジャアファル・カーシフ・アル＝ギターの娘であった。

18) Seyyed Ḥoseyn Ṭabāṭabā’ī Borūjerdī 1875年4月セイイエド・アリー・ブン・サイエド・アフマド・タバターバーイー (Seyyed ‘Alī ibn Seyyed Aḥmad Ṭabāṭabā’ī) の子として生まれる。1947年アーヤトッラー・コンミー (Seyyed Āqā Ḥoseyn ibn Moḥammad Ṭabāṭabā’ī 1865-1947) の死後、同時代で唯一の法学権威となる。ホセイーン・ボルージュエルディーの法学界における権威によりコムが同時代の学問的中心となる。またヨーロッパなどにモスクを建造するなど、国外に積極的な布教活動をおこなった。パハーイー教徒撲滅運動及び農地改革に関しては政治的発言を行ったが、概して政治的静謐主義の立場をとった。1961年3月31日に死去し、莊嚴モスク (Masjed-e A‘zam) に埋葬される [‘Abīrī 1382: 662-672; Hairī 2004: 157-158]。

信仰生活の手引き書であり、同書の出版以降、法学権威を志す法学者の間ではこの類の書を執筆することが慣例となった。このような学術的人間関係や一般信徒とのつながりによって彼は大法学権威に屈指されるのである。

彼が生きた時代、イランでは立憲革命が起こるとともに、イラクでは英国による占領の時代を迎えていた。彼はこれら政治的事件に積極的に関与したが、同時に血気にはやる法学者たちをいさめる役割も果たした。彼は1921年にその生涯を閉じたが、彼が遺した偉大な軌跡は消えることはなかった。彼の息子たちの多くが高名な法学者となり、また彼の娘は高名な法学者と婚姻関係を結び、彼の一族は大いに繁栄した。[al-Jabūrī 1385: 17-90, 138-139, 499-522]

このようにムハンマド・カーズィム・ヤズディーは、法学者家系ではなく、地主の家庭に生まれながら、自身の学術的資質と努力によって高名な法学者となった。彼についての記述から明らかになるのは、学問的な資質が法学者にとっての最大の要件であり、既述の法学者の生涯を形成する諸要因は必要条件に過ぎないことだけではない。彼の生涯の中で、ナジャフへの遊学の資金を提供したのがイスファハーンのマドラサの講師であった。ここからアタバートの法学者を中心に、アタバートの法学者と学術都市の法学者との間にはインフォーマルなネットワークが張り巡らされていたことが想像される。そして、法学者のキャリアパスを形成する要因、さきほど必要条件として挙げた諸要因がそのインフォーマルなネットワークにも作用し、法学者とそれを支える法学界内部の関係性として展開していたと考えられる。それでは、このような関係性がどのように変容し、フォーマルなヒエラルキー制度を形成していったのだろうか。

#### IV. 「現代」イランにおける法学者の生涯とキャリアパス

「近代」における法学者は、幾つかの共通点をもっており、それらの共通点が、同時代における法学者のキャリアパス形成に作用していたことはすでに述べた。それではコムが学術拠点として復興を遂げる中、法学者のキャリアパスはどのように変化したのであろうか。

まず初等教育の義務化によって大多数が公立学校での義務教育修業後に、マドラサに入学するという変化が見られる。また出身階層に関しても変化が見られる。既述のように、「近代」では法学者の出身家庭が中心であった。革命以降「現代」に重要な法学者となったものも、多くが法学者や法学教育を過去に経験したものの子弟、また伝統的に強い繋がりが指摘されているバーザール商人の子弟が多くを占める。しかしそれに加え、農民や労働者、また公務員など様々な階層の家系出身者が法学教育を受けるようになった [cf. Šāleḥ (ed.) 1385: Vol.3, pp. 22, 65, 105, 197, 219, 319, 371, 377, 389, 445, 485, 503, 521]。このような変化は、職位が特定の成員によって独占されていた法学界の変容を示しているといえる。また「近代」においては、サイドが法学者の多数を占めていたが、時代の展開とともにサイドではない法学者も相対的に増加している。

またイラン・イスラーム革命の存在が法学者の生涯に大きな影響を与えたことは想像にかたくない。法学者の反王政運動への参加が後の法学者の社会的モビリティ獲得に大きく影響したからである。法学者は革命以降政治など幅広い場で活動を展開しているのである。

これらの舞台で要職に就くためには単に法学者であるだけでなく、反王政活動にどのように関係していたかが問題となる。それを端的に示すのがモハンマド・メフディー・ラッバーニー・アムレシー (Āya Allāh Moḥammad Mehdī Rabbānī Amleshī)、ホセイーン・ラースティー・カーシャーニー (Āya

Allāh Hoseyn Rāstī Kāshānī)、またモハンマド・メフディー・ラッバーニー・アムレシーのキャリアパスである。

モハンマド・メフディー・ラッバーニー・アムレシーは1935年に、精神的指導者アブー・アル＝マカーレム (Abū al-Makārem) の家に生まれた。彼は6歳の時に母を亡くし、再婚するまで父によって育てられた。その当時彼らはコムに住んでおり、彼は5歳の時マクタブハーネに通い、そこでクルアーンやペルシア語の読み書きを2年間学んだ。彼の父はパフラヴィー朝によって創設された公立学校を信頼していなかったが、彼は小学校に通った。そしてその後コムのハウザに入学した。

コムの有名な法学者の下で入門、中級課程を受け、さらに上級課程ではホセイン・ボルージェルディーやホメイニーの講義に参加した。彼は18歳足らずで結婚し、一男四女をもうける。父が人々の呼びかけでアムレシュに移住した際、彼は父の新居を購入するために、その時父と同居していた家売り払い、妻の父の家に住むようになった。当時、彼はモハンマド・タキー・ハーンサーリーの訃報を聞きつけ、病院に駆けつけた。彼の学友の中にはハーメネイーがおり、ハーメネイーとは一年間ともに学んでいた。また彼は師に当るホメイニーとは単に学術的な繋がりだけでなく、思想的な繋がりを持っていた。ホメイニーが追放された際、ムハッキク・ダーマードという高名な法学者に師事したが、彼とホメイニーの間に横たわる思想的紐帯は途切れることはなかった。

反パフラヴィー王政運動時には、彼はイラン国内で布教活動を勤めるとともに、その旅の途上で人々に訴えかけ、反王政運動を呼びかけた。そして1343/19645年にカーシャーンで布教活動を展開していた際、人々に反王政運動の参加を呼びかけたかどで逮捕される。また1352 AHS/19734年に25名のハウザ講師とともに逮捕され、シューシュタル、次いでフェルドウースに追放された。反王政運動へ彼が積極的に参加したことが、イラン・イスラーム革命後、革命体制によって肯定的に評価され、憲法制定に関する専門家会議議員、カーディー最高評議会委員、監督者評議会委員、第二期イスラーム議会議員など新体制を支える重要な職を歴任した。また彼はコム・ハウザ講師組合委員であり、ハウザの運営にも深く関わった。1364 AHS ティール月17日 /1985年7月8日に51歳の若さで逝去した。[cf. Šāleḥ (ed.) 1385: Vol.3, p. 20]

またホセイン・ラースティー・カーシャーニーは以下の通りである。

1306 AHS/19278年、カーシャーンのソルトーン・アミール・アフマド街区 (maḥalle-ye Solṭān Amīn Aḥmad) で生まれる。彼の父アリーは絹織物業を営む傍ら、非常勤公務員として働いた。彼の父は信仰に対して理解の深い人物であった。彼はカーシャーンの町の小学校を卒業した。しかし家庭の事情で中学校へは行かず、商館や商店で勤めていた。その後、絨毯画の下絵師を志し、有名な下絵師の下で修行を積んだ。しかしその後法学者を志し、カーシャーンのハウザの門を叩いた。カーシャーンのハウザでは、入門と中級課程の一部を修了し、更なる修学を求めてコムへ移住した。

コムでは中級課程の法学や法源学を学びながら、ファルサファ、神学、クルアーン解釈学にも精力的に取り組んだ。さらにコムだけでなく、ナジャフに赴き、ナジャフでは25年間学んだ。

彼はムフスィン・ハキーム<sup>19)</sup> などナジャフの高名な法学者に学び、特にアブー・カースィム・フーイー<sup>20)</sup> の下で修学した。それとともに亡命中のホメイニーの講義にも精力的に参加した。またナジャフでは、修学に加え、教授活動を開始した。彼はカーシャーン、コム、ナジャフで50年以上にもわたり、教授活動を行っており、多くの若い学生を育てた。

このような学問的活動の一方で、反王政運動期にはホメイニーの代理人としてアバダーンを訪れ、同地の石油関係労働者のストライキ実行に関与した。またテヘラン大学のモスクにおいて反王政演説も行った。しかしながら彼の反王政活動は利己的な活動ではなく、法学界への奉仕だったので革命後も政治的要職に就かなかった。彼が革命後に勤めたのは、ハウザ運営委員会におけるホメイニーの代理人、またハウザ運営評議会委員など、ハウザ運営に関わる要職である。彼はコム・ハウザ講師組合委員も務めている。[cf. Šāleḥ (ed.) 1385: Vol.3, pp. 197-200]

3名のキャリアパスから革命以降の法学者のキャリアパスに関して、三点指摘できる。既に指摘したとおり、法学者以外の家庭出身者が顕著になっている。その背景には、「近代」において顕著であった王朝による庇護が、パフラヴィー朝による「政教分離」政策の下で「職」が失われていったことが挙げられる。第二点は、それに関連して法学者を志す理由が多目的化していることである。そして法学者のキャリアパスとしての政治参加の重要性が第三点である。第三点に付け加えて、政治的権力を獲得した法学者の集団に組することも重要なキャリアとなる点も指摘しておきたい。そのことは、モハンマド・レザー・ジャムシーディー (Ḥujja al-Islām wa-al-Muslimīn Maḥmūd Reẓā Jamshīdī) の半生にはっきりとあらわれる。

1344 AHS/1965-6年、モハンマド・レザー・ジャムシーディーはコムの労働者の家庭に生まれた。彼は12歳の時に既にハウザで学ぶ入門の一部を学んでいたが、1362 AHS/1983-4年に高等教育を修了した後、正式にハウザに入学する。彼が大学ではなく、ハウザでの教育を選択した背景には、彼が中学生の頃にモタッハリーやアッラーメ・タバータバーイーの著書を熟読したことがある。彼は入門課程を修了し、レザウィー学院において4年間中級課程を学んだ。さらに中級課程を修了し、上級課程でファーゼル・ランカラーニー<sup>21)</sup>、ジャヴァード・タブリーズィー<sup>22)</sup>、ヴァヒード・ホラーサーニー (Vaḥīd Khorāsānī) に学んだ。彼はまたメスバーフ・ヤズディー<sup>23)</sup> を中心とした新神学派 (Gorūh-e Kalām-e Jadīd) に属していた。

このような学問修養の一方で、中級課程で教鞭をとり、現在もそれに従事している。またム

19) Sayyid Muḥsin ibn Maḥdī al-Ṭabāṭabā'ī al-Hakīm al-Najafī 1889年にナジャフで生まれ、アーフンド・フラーサーニーやムハンマド・カーズィム・ヤズディーらに学ぶ。ナジャフで教鞭をとり、ボルージェルディーの死後、シリア派法学界を先導する法学権威となる。同時代のイラクで普及していた社会主義や共産主義に対して批判的な姿勢をとる。1970年にナジャフで没し、同地に埋葬される [Momen 1985: 313]。

20) Abū al-Qāsim ibn 'Alī Akbar al-Mūsawī al-Khū'ī al-Najafī 1899年、アゼルバイジャンのフーイーに生まれる。1912年ナジャフに赴き、ナーイニー、イラーキーらに学ぶ。ムフスィン・ハキームの死後、ナジャフの法学界を先導する。イラン以外の地域の一般信徒の大多数が彼に習従し、ホメイニーと一般信徒を二分するといわれる [Momen 1985: 315]。1992年に死去する。

21) Moḥammad Fāẓel Lankarānī 1931年に法学者の家系に生まれる。コムでボルージェルディー、ホメイニーに師事した。革命時には直接的に運動に参加しなかったが、コムで教鞭をとりながら支持した [Šāliḥ ed., 1385: 305-309]。2007年6月16日に死去。

22) Mirzā Javād Tabrīzī 1926年にタブリーズの有名な商家に生まれる。同地で初歩的教育を受け、1948年に学問修得を目的にコムへ移住し、ボルージェルディー師らに師事する。コムで教育を受けた後、イラクへ遊学する。1976年に再びコムに戻り、同地で教鞭をとり、2006年に死去 [‘Abbās-Zāde 1386: 457-473]。

23) Moḥammad Taqī Meṣbāḥ Yazdī 1934年に初頭・中等教育をヤズドで学んだ後、コムでホメイニーらに学ぶ。イラン革命以降、専門家会議議員などの役職を勤めるほか、テヘランの金曜礼拝導師、またコム・ハウザ講師組合員である [Šāleḥ (ed.) 1385]。

ルタダー・アンサーリーの『用益の書』注釈などハウザで使用される法学や法源学の注釈書を著している。女子ハウザの指導者でもあり、後進の教育に精力を注いでいる。他方、彼は革命防衛隊に参加し、長年にわたり同組織に協力的姿勢を示している。現在彼はコム・ハウザ講師組合委員である。[cf. Sāleh (ed.) 1385: Vol.3, 105-108]

これらは法学者が法学界だけでなく社会の至るところに介在するようになった革命以降、法学者が「法学者の統治」に対する忠誠心と彼らに対する忠誠心が重要となったことを示している。それとともに、モハンマド・メフディー・ラッバーニー・アムレシーやモハンマド・レザー・ジャムシーディーのキャリアパスには、コムがイラン出身の法学者にとって重要な学問都市となったことがはっきりとあらわれている。

「現代」の法学者にとって、コムの学術都市としての復興はきわめて重要な意味を持っている。アタバートが最終的な修学地となっていた状況は、1921年にハーエリー・ヤズディー (‘Abd al-Karīm Ḥā’erī Yazdī) がコムに移住し、コムが学術拠点としての復興はじめてから、徐々に変化する。図2はコム復興後に誕生したコム・ハウザ講師組合のイラン出身の法学者の最終修学地の推移を表している<sup>24)</sup>。1940年代以前に誕生した法学者の何割かはナジャフで学問を修了していたのに対して、1950年代以降に誕生した法学者は全員コムで学業を修了している。法学者の多くが二十代から三十代のうちにアタバートに修学に訪れていることを考慮すると、1970年代以降に少なくともイラン出身の学生にとってコムがナジャフを越える学問拠点として確立したのではないだろうか。

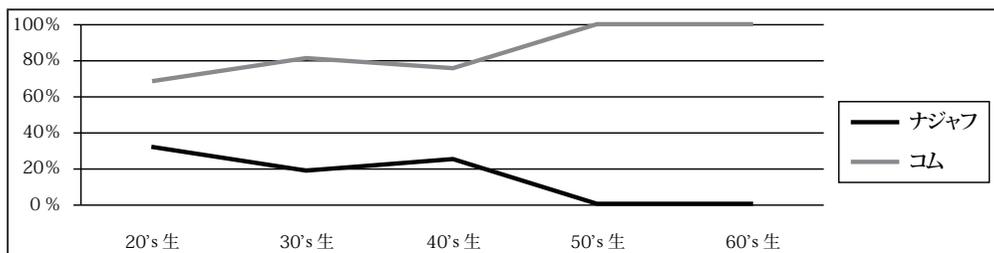


図2 コム・ハウザ講師組合員の修学地の推移 [Sāleh (ed.) 1385: Vol. 3] を基に作成

このようにコムの学術都市としての復興、またイラン革命が法学者のキャリアパスに変容をもたらしたことは明らかであるが、変容しない側面もあることを指摘しておかなければならない。すなわち、法学者としての学識である。例えば、アリー・ナクーンナム・ゴルパーイガーニー (Hujja al-Islām wa al-Muslimīn ‘Alī Nakūnām Golpāyġānī) の生涯とロトフォッラー・サーフィー (Loṭf Allāh Šāfi Golpāyġānī) の半生からそのことが読み取れる。

アリー・ナクーンナム・ゴルパーイガーニーは1323 AHS/1944-5年、ゴルパーイガーンのサイーダーバードの農家に生まれた。父は敬虔な人物であり、彼の母方の祖父は法学者であった。彼はマクタブ・ハーネに通い、そこでクルアーンとペルシア語の読み書きを学んだ後、公立の小

24) イラン出身の法学者に限定している。そのため、ナジャフ出身のマフムード・ハーシェミー・シャーフルーディー (Maḥmūd Ḥāshimī Šāhrūdī) は含まれていない。

学校に入学した。そして小学校卒業後、アラークのハウザの門を叩き、イスラーム学を学び始めた。そして数年後の 1340 AHS/1961-2 年、入門課程の途中でコムに移住し、同地で修学する。彼はコムで入門課程と中級課程を修了させ、上級課程へと歩を進めた。上級課程を学ぶ傍らで、彼は倫理学講義にも参加した。上級課程では、レザー・ゴルパーイガーニー、ヴァヒード・ホラーサーニーに長年師事した。

彼は反王政運動の熱が若い学生を中心に吹き荒れた時代に、コムにおいて学生生活を送っていた。しかし彼は反王政運動に参加することなく、また革命後も新体制の下で政治的要職に就くこともなく、自身の学問的研鑽と後輩たちの指導に明け暮れた。彼はコム・ハウザ講師組合委員であったほか、教授活動と若い学生の指導に尽力した。[cf. Sāleh ed., 1385: Vol.3, pp. 503-504]

次にロトフォッラー・サーフィーの半生は次のように記述されている。

1919 年 2 月 20 日、モッラー・ムハンマド・ジャヴァード・サーフィー (Mollā Muḥammad Javād al-Ṣāfi d. 1959) の家に一人の男が生まれた。その子供はロトフォッラーと命名された。サーフィー家は代々の法学者家系であり、祖父モッラー・アッバース・サーフィー (Mollā ‘Abbās al-Ṣāfi) も法学者であり、父モハンマド・ジャヴァードもまた法学者であった。モハンマド・ジャヴァードは、1287 AH/1870-1 年にゴルパーイガーンで生まれ、中級課程をゴルパーイガーンで学んだ<sup>25)</sup>。その後、1887/8 年にイスファハーンに赴き、同地の法学者に学ぶ。さらに立憲革命時にテヘランに赴き、ファズロッラー・ヌーリー<sup>26)</sup>ら当時の高名な学者に学んだ。彼はファズロッラー・ヌーリーの死後、コムとゴルパーイガーンの一般信徒の信仰生活における模倣となる傍ら、教授活動なども積極的に行った。一方母も法学者の家門に属し、モッラー・モハンマド・アリー (Mollā Muḥammad ‘Alī) という法学者の娘であった。

ロトフォッラーの生家は法学者の家系であり、彼の兄弟も法学者となる教育を施されていた。兄アリー・サーフィーは 1332 AH/1914-5 年に生まれ、19 歳になるまで父ムハンマド・ジャワードに学び、その後コムやナジャフで学問的研鑽を遂げた。そこで大法学権威であったホセイーン・ボルージェルディーだけでなく、レザー・ゴルパーイガーニー<sup>27)</sup>にも師事した。彼はレザー・ゴルパーイガーニーの高弟であり、命を受けフランスに亡命中のホメイニーと面会した。もう一人の兄ファフル・アッ＝ディーン・サーフィー (Fakhr al-Dīn Ṣāfi d. 1357 AHS/1975-6) も法学教育を受けていたが、彼は法学者の道を進むのではなく、書家として、また歴史家の道を進

25) 1278 AH となっていたが、ウェブでは 1287 AH と記されていた。

26) Fazl Allāh al-Nūrī 1259/1843-4 年、マーザンダラーンのラーシュク (Lāshk) に生まれた。ヌール地区の中心であったバラデ (Balade) で初等教育を受けはじめ、その後テヘランに移住し、中級課程を修了する。さらにその後、ナジャフへ移住し、ミールザー・ハビーブッラー・ラシュティー、ラーズィーらに学んだ後、ムハンマド・ハサン・シーラーズィーの講義に参加した。ムハンマド・ハサン・シーラーズィーがナジャフからサーマッラーへ移住する際に随行し、そのまま同地で学んだ。ファズロッラー・ヌーリーは、タバコ・ボイコット運動に積極的に参加したが、イラン立憲革命に当初参加していたものの、立憲派が考える立法権とシャリーアに基づく立法が矛盾することなどを指摘したことで、立憲制に反対する側にまわった。反革命運動が下火になる中、1909 年に絞首刑に処された。立憲革命の反革命派となったことでヌーリーは否定的に扱われてきたが、の学者として革命以降のイランでは再評価をうけるようになった [‘Ab-Lashkarī 1385: 419-31]。

27) Rezā Golpāyghānī 1899 年 3 月 20 日、ムハンマド・バーキル・イマーム (Sayyid Muḥammad Bāqir Imām) の子としてゴルパーイガーンに生まれる。同地で教育を受けた後、アラークのハーエリー・ヤズディーのもとで学ぶ。ハーエリー・ヤズディーのコム移動にともない、コムへと学業の拠点を移す。ホセイーン・ボルージェルディーの死後、同時代の法学権威として認められ、シャリーアトマダグリーやマルアシー・ナジャフィーらとともにコムのハウザの運営に携わる。1993 年 12 月 9 日に死去する [n.d. 1382: 945]。『法学者の統治』体制に関しては、賛否を明らかにしなかった [富田 1997]。

んだ。

このような家庭に生まれたロトフォッラーも、法学教育を受けることになった。ゴルパーイガーで入門課程をモッラー・アブー・カーセム (Mollā Abū al-Qāsem) に学び、中級課程を父モハンマド・ジャヴァードに学んだ。そして彼は 1360 AH/1941-2 年にコムに移住し、同地の大法学者の上級課程に参加した。1364 AH/1945-6 年には、兄アリーとともにナジャフに参詣し、そのまま同地に留まり 1 年間にわたり同地の大法学者の上級課程に参加した。その後、彼はコムのハウザで教育活動と研究活動に勤しんだ。

彼が師事した高名な法学者として、ホセイン・ボルージェルディー、モハンマド・タキー・ハーンサーリー<sup>28)</sup>、サドル・アッ＝ディーン・サドル<sup>29)</sup>、レザー・ゴルパーイガーニー、ジャマールロディーン・ハーシェミー・ゴルパーイガーニーが挙げられる。彼は 1375 AH/1955-1 年にジャマールロディーン・ハーシェミー・ゴルパーイガーニーにイジュティハードの許可を与えられた後、他の大法学者にも認められた。それとともにアーガー・ブズルク・ティフラーニーからは、ハディース伝承の許可が与えられた。また彼はボルージェルディーのファトワー会議のメンバーでもあった。

このような教授活動や研究活動の一方、イスラーム革命以降、彼は憲法制定会議メンバーとして新体制に参加した。1979 年にはホメイニーによって監督者評議会委員に任命され、1989 年に辞任するまで同職を務めた。しかしながら新体制へ参加後も彼は法学者として後進の教育やレザー・ゴルパーイガーニーの法学権威事務所の中核的メンバーとしての役割を担っていた。また私生活では、レザー・ゴルパーイガーニーの娘と結婚し、5 男 3 女をもうけた。5 男のうち、モハンマド・ハサンは法学者である。さらに 3 女の娘婿はすべてアーヤトッラー・アリー・カリミー・ジャフラーミー (Āya Allāh ‘Alī Karīmī Jahramī)、ムルタダー・アンサーリーの子孫の法学者であるムハンマド、法学者の息子モハンマド・ホセイン・ファキーヒー・レザヴィー (Hujja al-Islām wa-l-Muslimīn Moḥammad Ḥoseyn Faqīhī Rezavī) といった法学者や法学者の子弟であった。

学術的・社会的な献身の功により、一般信徒は彼を法学権威に選出しようと試みた。彼はその要請を受け、1372 AHS/1992-3 年に彼のレサーレイェ・アマリーを執筆し、法学権威と認められた。[cf. Aḥmadī 1386: 392-405]

前者は反王政運動と関係することなく、また革命後の新体制に関与することなく自身の学問的研究と教授活動に専念した。彼のような、法学者育成の「現場」で地盤をもつ法学者は革命の有無に関わらず、法学界にとって重要な役割を担っている。また後者は革命運動に参加しなかったものの、法学者としての能力を新体制が必要としたことを示している。法学者が単に革命運動への奉仕だけをもって彼らの重要性が決定されるのではないということが伺えよう。

28) Āya Allāh Seyyed Moḥammad Taqī Khwānsārī 1851 年にハーンサールに生まれる。A. フラーサーニー (Ākhund Khurāsānī) やムハンマド・カーズィム・ヤズディーに学ぶ。イラクにおける 1920 年の反英闘争に参加した結果、イラクを追われる。ハーエリー・ヤズディーの招聘により、アラークに身を寄せ、ハーエリー・ヤズディーのコム移動にともないコムへ移動する。ハーエリー・ヤズディー師の死後もコムで教鞭をとり、学問都市としてのコム復興を助け、1952 年に死去 [Īdram 1382: 617-623]。

29) Āya Allāh Seyyed Sadr al-Dīn Sadr ナジャフのシャリーフ家系に生まれ、後にマシュハドに移住。コムに移住し、ハーエリー・ヤズディー師に師事する。ハーエリー・ヤズディー師の死後は、1954 年に死去するまで、ハーンサーリー師らとともにコムのハウザ運営に携わったとされる。レバノンのシーア派指導者として活躍したムサー・サドル師 (Imām Mūsā Ṣadr) の父にあたる [Abāzārī 1382: 785; Shīrkhānī 1386: 34]。

#### IV. 結び

本論文においては、「近代」と「現代」の12イマーム派法学者のキャリアパスの特徴を、具体的な法学者の生涯を交えて論じた。具体的には1920年代に始まるコム<sup>1</sup>の学術都市としての復興を分岐点とし、18世紀半ばからコム復興以前を法学者にとっての「近代」、コム復興以降を法学者にとっての「現代」とし、それぞれの時代の法学者のキャリアパスに関して、具体的な法学者のキャリアパスを参照しながら、特徴の抽出を試みた。そしてその中で、それぞれの時代において、法学者のキャリアパスを形成する要因を論じた。

「近代」では、法学者を志す者の多くが、法学者の子弟であり、法学が半ば家業となっていた。その背景には、第一に法学者と法学者の娘との婚姻、第二に王朝の庇護によって展開されていた礼拝指導者、モスクや廟の管理人などの「宗教」職の世襲があった。特に後者は、法学者を家業化させるだけでなく、法学者の修学過程にも作用していた。同時代において、法学者を目指すものの最終修学地は、高名な法学者が居し、また教鞭をとっていたイラクのアタバートであった。彼らの多くは、イスファハーンやテヘラン、またラクナウなどの地方の学術の中核都市での研鑽を経て、アタバートを目指した。しかし、彼らの多くは、アタバートで自身が高名な法学者になるわけではなく、それらの都市で研鑽した後、アタバートを目指すことなく修学をやめて世襲の職位に就くものがあったし、またアタバートに至り研鑽したとしても、出生地に戻って世襲の職に就くものもいた。つまりそこでは、家系や職位、また修学過程がそれぞれに作用しあいながら法学者のキャリアパスを形成していった。

一方、国民国家形成とパラレルに展開したコム<sup>1</sup>の学術都市としての復興は、アタバートに対するオルタナティブな存在として出現し、法学者のキャリアパスにも大きく作用した。「近代」の家業としての法学者と比較すれば、「現代」においてはより多種多様な出身層からまた多種多様な目的をもって法学者を志す傾向にある。その背景には、「近代」において展開していた王朝による庇護の喪失、またイラン・イスラーム革命の影響によって法学者が社会の様々な分野で活躍するようになった事態がある。また後者で特筆すべきは、反王政運動への関わりが、法学者のキャリアパスに大きな影響を及ぼすようになったことである。

こうした変容の中で、すでに述べたように法学者のインフォーマルなヒエラルキーがフォーマルな制度となるとともに、イラン的<sup>2</sup>制度として幅広く認識されていったのだが、それを次のように説明しなおすことが可能であろう。「近代」に展開していた法学者を支えるインフォーマルなネットワークが、パフラヴィー朝の西欧化政策によって徐々に解体されていき、「現代」になり王朝の庇護を失った。それと同時に、国民国家体制の樹立が急激に進められ、法学者にとってもイラクとイランの間には緩やかながら境界が引かれていった。そしてコム<sup>1</sup>の学術都市としての復興はその12イマーム派法学界分断という状況下で、イラン国内のシーア派にとって一つの中心を形成させることになった。それは「近代」において、アタバートを中心として展開していたインフォーマルなネットワークから、イランの各都市との間に展開していたネットワークを解体させるものでもあった。そしてそれは同時にイランを中心とし変容していく社会に適應した新たなネットワークが形成され、イラン独自のシステムや運動が展開していく契機にもなった。

本稿では、法学者を法学者たらしめる関係性の変容に焦点をあてた。そしてその変容の中で形成されたイラン12イマーム派法学界の独自性が、現在のシーア派社会に新たな影響を与えている。

しかし変容したものがある一方で、変わらないものもある。それこそが、法学者としての学識の深さである。そしてこれこそが、おそらく社会や法学界の変容に関わらず、法学者を法学者たらしめる関係性を背後から支えているのである。

## 参考文献

- 黒田賢治 2007 「革命イランにおける政教関係の再考——ハウザの教育機能と政治・社会的関与」『イスラーム世界研究』1巻2号, pp. 333-352.
- 桜井啓子 2006 『シーア派』中央公論社.
- ダバシ, H. 2008 『イラン、背反する民の歴史』青柳伸子・田村美佐子(訳) 作品社.
- 東長靖 2002 「ウラマー」大塚和夫他(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, pp. 204-205.
- 富田健次 1997 「ヴェラーヤテ・ファギーフ体制とマルジャエ・タグリード制度」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第35巻, pp. 39-58.
- 2002 「アンサーリー, モルタザー」大塚和夫他(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, pp. 101-102.
- 松永泰行 2002 「マジュリスイー」大塚和夫他(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, p. 911.
- 山尾大 2006 「戦後イラクの政治変動とシーア派最高権威の国民統合論——スイースターニーのファトワーから」『イスラーム世界研究』第1巻2号 pp. 210-269.
- Abāzarī, ‘A.R. 1382. s.v. “Emām Mūsā Ṣadr,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.2 Qom: Nashr-e Ma’rūf.
- ‘Abbās-Zāde, S. 1382. s.v. “Shaykh ‘Abd al-Karīm Ḥā’erī Yazdī,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.2 Qom: Nashr-e Ma’rūf.
- Āb-Lashkarī, M.H. 1385. s.v. “Sheykh Faḡl Allāh,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.1 Qom: Nashr-e Ma’rūf.
- Aḥmadī, M.I. 1386 (2007). s.v. “Āya Allāh Loṭof Allāh Ṣāfi Golpāyḡānī,” in Pazhūheshkade-ye ‘Elmī, ed. 1384-6. *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.7. Qom: Nūr al-Sajjād.
- Algar, H. 1969. *Religion and State in Iran, 1785-1906: The Role of the Ulama in the Qajar period*. Berkeley: University of California Press.
- . 2000. s.v. “Tīhrānī,” *EF*.
- Amanat, A. 1988. “In Between the Madrasa and the Marketplace: The Designation of Clerical Leadership in Modern Shi’ism,” in Arjomand, S. A. ed., *Authority and Political Culture in Shi’ism*, Albany: State University of New York Press, pp.98-132.
- . 1989. *The Resurrection and Renewal: The Making of the Babi Movement in Iran, 1844-50*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Amānī, M.R.S. 1382 (2003-4). s.v. “Kāshif al-Ghiṭā’,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeḡi Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.2. Qom: Nashr-e Ma’rūf.
- Aziz, T. 2001. “Baḡir al-Sadr’s Quest for the Marja’iya,” in Linda S. Walbridge (ed.), *The most Learned of the Shi’a: The Institution of the Marja’ Taqlid*, New York: Oxford University Press, pp.140-148.

- Badry, R. 2000. s.v. “al-Ṭīhrānī,” *EF*.
- Cleave, R. 2004. s.v. “Khums,” *EF*.
- Dabashi, H. 1993. *Theology of Discontent: The Ideological foundations of the Islamic Revolution in Iran*. New York: New York University Press.
- Eslāmī, E. 1385. “Şāheb Javāher,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeġī Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.1. Qom: Nashr-e Ma‘rūf.
- Fischer, M.M.J. 1980. *Iran: From Religious Dispute to Revolution*. Cambridge: Harvard University Press.
- Floor, W. 2001. “The Economic Role of the Ulama in Qajar Persia,” in L. S. Walbridge ed., *The Most Learned of the Shi‘a: The Institution of the Marja‘ Taqlid*, New York: Oxford University Press.
- Ḥabībābādī, M. ‘A.M. 1337-77 (1918-58). *Makārem al-Āthār dar Aḥwāl-e Rejāl-e Doele-ye Qājār*. Işfahān: Mo‘assese-ye Nashar-e Nafā‘es-e Maḥtūtāt.
- Hairi, A. 1986. s.v. “Khurāsānī,” *EF*.
- Īdram, Ḥ. 1382. s.v. “Seyyed Moḥammad Taqī Khvānsārī,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeġī Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.2 Qom: Nashr-e Ma‘rūf.
- al-Jabūrī, K. S. 1385 (2006-7). *al-Sayyid Muḥammad Kāẓim al-Yazdī: Sīrat-hu wa Aḍawā‘ alā Marjī‘īyyat-hu wa Mawāqif-hu wa Thā‘iq-hu al-Siyāsīya*. Qum: Manshūrāt Dhawī al-Qurbā.
- Kayyānī, ‘A. 1382. s.v. “Seyyed Jamāl al-Dīm Golpāyġānī,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeġī Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.3 Qom: Nashr-e Ma‘rūf, pp.336-46.
- Laṭīf Pūr, Y.A.H. 1379 (1999-2000). *Farhang-e siyāsī-ye shī‘e va-enqelāb eslāmī*. Tehtan: Markaz-e Esnād Enqelāb-e Eslāmī.
- Litvak, M. 1998. *Shi‘i Scholars of Nineteenth-century Iraq : The ‘Ulama’ of Najaf and Karbala’*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Mervin, S. 2004. “Les Autorités Religieuses dans le Chiisme Duodécimain Contemporain,” *Archives de Sciences sociales des Religions*, vol. 125, pp.63-78.
- Moḥammadī, M.A. 1385. “Mollā Faṭḥ Allāh Işfahānī,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeġī Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.1 Qom: Nashr-e Ma‘rūf.
- Momen, M. 1985. *An Introduction to Shi‘i Islam*. New Haven and London: Yale University Press.
- Mottahedeh, R. 1985. *The Mantle of the Prophet: Religion and Politics in Iran*. New York: Simon and Schuster.
- Moussavi, A.K. 1994. “The Institutionalization of Marjī‘ al-Taqlīd in the Nineteenth Century Shī‘ite Community,” *The Muslim World*, vol. 84, no. 3-4. pp. 279-99.
- Nakash, Y. 1996. *The Shi‘is of Iraq*. Princeton, N.J. : Princeton University Press.
- Şāleḥ, S.M, ed. 1385. *Jāme‘-e Mudarresīn-e Ḥowze ‘Elmīye-ye Qom: Az Āghāz tā Aknūn*. vol.3-8. Tehrān: Enteshārāt-i Markaz-e Esnād-e Enqelāb-e Eslāmī.
- Sardrūdī, M.S. 1385. “Muḥaddith Nūrī,” in Pazhūheshgarān-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom, ed., *Golshan-e Abrār: Kholāṣeh-ye az Zendeġī Asveh-hā-ye ‘Elm va ‘Aml*, vol.1 Qom: Nashr-e Ma‘rūf.
- Shīrkḥānī, A.Z.A. 1386. *Taḥavvolāt-e Ḥowze-ye ‘Elmīye-ye Qom pas az Pīrūzī-ye Enqelāb-e Eslāmī*. Tehrān: Enteshārāt-e Markaz-e Esnād-e Enqelāb-e Eslāmī.
- Sachedina, A.A. 1988. *The Just Ruler (al-Sultān al-‘ādil) in Shī‘ite Islam: The Comprehensive Authority of*

*the Jurist in Imamite Jurisprudence*. New York and Oxford: Oxford University Press.

Tājīk, H. 1377 (1997-8). *Nofūdh-e Farhang-e Gharbī va Ravābet-e Din va Dowlat dar Īrān Nīme-ye Dovvom-e Qarn-e Nūzdahom (Influence of Western Culture and Relationship between Religion and State in Iran Late 19th Century)*. Unpublished.

al-Ṭīhrānī, A. B. 1404 (1983-4). *Ṭabaqāt A'lām al-Shī'a wa-Huwa Nuqabā' al-Bashar fī al-Qarn al-Rābi' 'Ashar*. Mashhad: Maṭba'at Sa'īd.